

はじめに

全国の小学校で、一斉に「特別の教科 道徳」がスタートしました。教科書を使った授業、道徳の評価が、はじめて導入されます。

読者のみなさんは、「特別の教科 道徳」がスタートする今、どのようなことを感じているでしょうか。

「道徳も教科になる。きちんと授業をしていかないと……」という、やらなければならないという責任感でしょうか。

それとも、「道徳の授業って、どうすればいいのかぜんぜん分からない。何かいい方法はないかな……」という不安感でしょうか。

あるいは、「そもそも、道徳の授業をするのが嫌なんだよな〜。どうしよう……」という嫌悪感でしょうか。

せっかく始まった「特別の教科 道徳」ですから、日本中の先生方に「子どもたちと楽しい授業ができそうだ!」「ものすごく楽しくてたまらない!」というわくわく感をたっぷりもっていただきたいと思います。これは、先生方のみならず、子どもたちについても同様です。

私自身、週に一度の道徳授業を楽しみに待っています。週に一度ある道徳授業までに、「次の授業では、子どもたちにどのような問いを出そうか?」ということはもちろんのこと、「子どもたちがどんな意見を出さだろうか?」という期待感や、「そもそも

〇〇って何だろう？」と次回の授業で扱う価値項目について自分自身の中で思考を深める時間をとても楽しんでいます。

また、授業では、子どもたちが感じたことを共有することに始まり、生み出された問いに対して、子どもたちからはじつにさまざまな角度から意見が出され、学級内で意見交流をしています。授業の終末では、道徳的価値に対する自分なりの意見を深めながら考えることに取り組んでいます。そして、毎回の授業後に読む子どもたちの授業の感想をとても楽しみにしています。そこには、私が思いもよらないような深い意見や、「なるほどなあ〜」と共感できる意見など、さまざまな感想が書かれているからです。

一方で、そうした道徳授業を、子どもたちはどのように感じているのでしょうか。

ある子は、「道徳の授業は、友達の見聞を聞き、自分を広げていく大切な時間だ」と言いました。また、ある子は、「道徳とは、新しい自分を発見する時間だ」と言いました。どちらの意見もなるほどと感心させられると同時に、道徳授業を子どもたちがそのようにとらえていることをうれしく思いました。

それでも、「そうは言ってもどうすれば……」と、なかなか不安を払拭できない先生もいらっしゃることでしょう。

そこで、本書を記させていただきました。

本書では、私自身が日々駆使している道徳授業の仕掛けや方法をふんだんに紹介しています。どの方法も、誰にでもすぐにできて、しかも、効果を実感していただけるものばかりです。試していただければ、教師も子どもたちも待ち遠しくなるような授業へと変わっていくことでしょう。いずれも私が繰り返し実践をくぐらせ、効果実証済みのものばかりです。ぜひ、日々の授業の中で取り組んでいただければと思います。

また、「評価」についても分かりやすく記させていただきました。「数値などによる評価は行わない」「個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること」など、今回の教科化にあたってはさまざまな考え方や観点が打ち出されましたが、それらの大切なエッセンスを抽出した上で、普段の授業ではどのような視点で子どもたちの姿を見ればいいのかという現場視点の評価についても触れています。

道徳が教科化されたことをきっかけに、全国の教室で、教師も子どもも授業が待ち遠しくてたまらなくなることを願ってやみません。本書がそのわずかなきっかけになればと願っています。

2018年3月1日 春一番が吹き荒れる明け方に

丸岡 慎弥

はじめに 3

CHAPTER 1 「特別の教科 道徳」を成功させる 学級づくりのポイント

- 1 道徳授業の土台となる「対話できる学級」 14
- 2 「聞く」姿勢を徹底して身につけさせる 16
- 3 どんな意見でも「認める」ことから始めよう 18
- 4 朝の会で子どもたちが自分の思いを語る機会を確保する 20
- 5 ペアトークやグループトークでの話し合いを日常化する 22
- 6 離席させて思い思いに話し合わせる 24
- 7 呼吸をするように「書くこと」を身につけさせる 26
- 8 「特別の教科 道徳」を成功させる学級づくりのポイント
低学年 28
- 9 「特別の教科 道徳」を成功させる学級づくりのポイント
中学年 30
- 10 「特別の教科 道徳」を成功させる学級づくりのポイント
高学年 32
- Column 1 「道徳読み」との出会い 34

CHAPTER 2 「特別の教科 道徳」を成功させる 授業づくりの基礎・基本

- 1 「教材研究」のポイント①
素材研究こそ教材研究の出発点 36
- 2 「教材研究」のポイント②
「道徳読み」で教材を見てみよう 38
- 3 「教材研究」のポイント③
教材文に書き込みをして何度も読み込む 40
- 4 「教材研究」のポイント④
その教材で「問いたいこと」は何かを考える 42
- 5 「教材研究」のポイント⑤
導入・中心発問を考える 44
- 6 「教材研究」のポイント⑥
自分自身を知る 46
- 7 「教材研究」のポイント⑦
自分自身を高める 48
- 8 「めあて」設定のポイント①
道徳授業の目的は「道徳観」を磨くこと 50
- 9 「めあて」設定のポイント②
道徳観を磨くためには「対話」にこだわる 52
- 10 「めあて」設定のポイント③
教材との対話で「道徳」を見つけさせる 54

11	「めあて」設定のポイント4	教師との対話で思考を刺激する	56
12	「めあて」設定のポイント6	友達との対話で異なる意見を知る	58
13	「めあて」設定のポイント6	自分自身との対話で自分の考えを深く掘り下げる	60
14	「机配置」を使いこなす1	目的に応じて机配置を自在に使いこなす	62
15	「机配置」を使いこなす2	「一斉型配置」で興味をぐいぐい引き出す	64
16	「机配置」を使いこなす3	「議論型配置」で一人一人の思考を深めさせる	66
17	「机配置」を使いこなす4	「コの字型配置」で話し合いをどんどん深めさせる	68
18	「机配置」を使いこなす5	「グループ型配置」で全員に対話させる	70
19	「机配置」を使いこなす6	「サークル」になって思いを伝え合わせる	72
20	「導入」で子どもを授業に引きつける1	なぜ導入が大切か？① —— 意欲付け	74
21	「導入」で子どもを授業に引きつける2	なぜ導入が大切か？② —— 全員を授業に参加させる	76

22	「導入」で子どもを授業に引きつける3	「自分ごと」としてとらえられるようにさせる	78
23	「導入」で子どもを授業に引きつける4	「過去」を聞くようにする	80
24	「導入」で子どもを授業に引きつける5	「うんうん！」と子どもが頷ける導入の発問がカギ	82
25	「導入」で子どもを授業に引きつける6	「未来」を見せて教材に期待をもたせる	84
Column 2 笑顔で話し合う二人			86

CHAPTER 3 「特別の教科 道徳」を成功させる 授業の組み立て

1	「気付き」から授業を組み立てる1	まずは教材を読んで印象に残ったことを聞く	88
2	「気付き」から授業を組み立てる2	授業に必要な意見をキャッチする	90
3	「気付き」から授業を組み立てる3	意見をまとめて「中心発問」につなげる	92
4	意見を構造的に深める「板書術」1	構造的な板書づくりのために必要なこと	94

5	意見を構造的に深める「板書術」②	
	構造的な板書づくりパターン1 発散型	96
6	意見を構造的に深める「板書術」③	
	構造的な板書づくりパターン2 収束型	98
7	意見を構造的に深める「板書術」④	
	構造的な板書づくりパターン3 時系列型	100
8	意見を構造的に深める「板書術」⑤	
	構造的な板書づくりパターン4 ディベート型	102
9	意見を構造的に深める「板書術」⑥	
	構造的な板書づくりパターン5 縦方向(上⇄下)型	104
10	心を奮立たせる「中心発問」①	
	子どもが本気で考える発問の条件とは	106
11	心を奮立たせる「中心発問」②	
	導入での子どもの印象を土台に発問を活かす	108
12	心を奮立たせる「中心発問」③	
	「AかBか?」「○か×か?」の 二項対立型発問で子どもの思考を刺激する	110
13	心を奮立たせる「中心発問」④	
	二項対立に「少しの工夫」を加えて さらに思考を刺激する	112
14	心を奮立たせる「中心発問」⑤	
	選択肢を用いない発問で思考を刺激する	114

15	心に落とし込む「授業のまとめ」①	
	自分の言葉でまとめの感想を書かせる	116
16	心に落とし込む「授業のまとめ」②	
	授業最後の発問にこだわる	118
17	心に落とし込む「授業のまとめ」③	
	まとめで余韻を残す	120
18	心に落とし込む「授業のまとめ」④	
	教師の感動を言葉以外のものにのせて伝える	122
19	心に落とし込む「授業のまとめ」⑤	
	説話ではなく子どもの言葉で印象に残す	124
20	心に落とし込む「授業のまとめ」⑥	
	ときには教師の語りで授業を終える	126
	Column 3 自分自身に哲学的な問いを向ける①	128

CHAPTER 4 道徳授業以外でも! 必ず子どもに教えておきたい「道徳」

1	立腰	130
2	挨拶	132
3	返事	134

4	履き物揃え	136
5	時を守り、場を清め、礼を正す	138
6	メンタルヴィゴラス	140
Column	自分自身に哲学的な問いを向ける②	142

CHAPTER 5 不安解消！「特別の教科 道徳」を成功させる評価のポイント

1	新学習指導要領が目指す道徳評価とは	144
2	指導要録への記載と通知表での示し方	146
3	道徳教育評価と道徳授業評価	148
4	年間を通した評価と授業1コマについての評価	150
5	評価規準・評価観点の作成ポイント	152
6	道徳授業評価の方法とポイント	154
Column	「道徳読み」で知った子どもの感性の豊かさ	156

おわりに..... 157

CHAPTER 1

「特別の教科 道徳」を成功させる

学級づくりの ポイント

道徳授業を充実させ、成功させていくカギは、学級づくりにあります。

道徳では、子どもたちが自分の思いを伝え合います。

それは学級風土が安全で安心した空間でなければ実現できません。

本章では、安全で安心した学級づくりについて紹介します。



道徳授業の土台となる 「対話できる学級」

いよいよ「特別の教科 道徳」が始まります。たくさん
のことが大きく変わり、不安です。まずは、学級で何から
取り組んでいくといいのでしょうか。



👉 **ここがポイント!**

『安全・安心な学級づくりに力をそそぐ』



まずは安全・安心の中で対話できる学級を

「特別の教科 道徳」の授業がいよいよスタートします。まず、学級で取り組むべきことは、「安全・安心の中で対話できる学級をつくる」ということです。

道徳の授業は、子どもたちの心の声を交わし合うことで成り立ちます。そのためには、「全員がどんな意見でも言える学級の雰囲気」が欠かせないのです。もちろんこれは、道徳の授業だけで構築するものではなく、学級内のすべての活動で構築していくものです。



安全・安心の中で対話できる学級の作り方

では、どのようにすれば安全・安心の中で対話できる学級をつくる
ことができるのでしょうか。

まずは、教師が授業の内外で「よいことはよい、悪いことは悪い」とはっきりと示すことです。学級におけるルールづくりが曖昧になってしまうと、子どもたちは安心感を得ることができません。「どんな意見でも言っていていいんだ」という安心感をもたせることが大切です。

日頃から、教師が「どんな意見も大切な意見だよ」と伝え続けてい
きましょう。



「対話スキル」上達のコツ

もちろん、「対話スキル」も上達させなければなりません。いきなり学級全体の前で意見を言うことが苦手な子が多いときには、ペアトーク（二人組で話すこと）から始めましょう。話題は何でもかまいません。「今日の朝ごはん」「好きなテレビ」などどんなことでもいいのです。

ペアトークに慣れたら、さらに、グループで話をするを取り入れてい
きましょう。小集団で対話することに慣れていくことから始めます。

➤ Advice!

「対話スキル」を上達させるには、「話し手」「聞き手」を決めて行うことです。また、対話の時間（20～30秒）を設定することも大切です。学年や学級の実態に合わせて「少し短いかな」と思う程度の時間から始めましょう。

2

「聞く」姿勢を 徹底して身につけさせる

ペアやグループで話し合い活動をする際に、対話スキルを取り入れて取り組みを重ねていますが、なかなか対話が深まりません。どうすればいいのでしょうか。



👉 **ここがポイント!**

「対話は「聞き手」こそが重要」



😊 対話で大切なのは「聞き手」

「対話をする」と聞くと、話し手の子どもを思い浮かべることがほとんどではないでしょうか。しかし、対話をするためには「話し手」と同様に「聞き手」が必要です。そして、授業の中で子どもが発言するときには「話し手」は一人であり、その他大勢が「聞き手」となります。

対話の質を高め、話し合いによる道徳授業へと発展させるには、聞き手こそを育てる必要があるのです。

😊 質の高い「聞き手」を育てるために

聞き手を育てるためには、まず上記のような聞き手の重要性を教師が子どもたちに語る必要があります。そして、「友達の意見は、目と心で真剣に聞こう!」と心構えを学級全体で共有しておくことも必要です。

さらに、「聞き手スキル」として「話している人のほうを向くこと」「要所でうなずきながら聞くこと」「ときには合いの手を入れること」を指導します。

😊 さらに聞き手の力を育てるために

聞き手の力をさらに育てるには、「子どもたちの意見をつないで学習を深める」ことが必要です。ある子が発言した後に「今の〇〇君の意見と同じ人は〇、違う人は×を書いてみましょう」などと、その子の発言を活かして授業を展開するのです。また、数人が発表した後に、「Aさん、B君、Cさん、Dさんの意見を聞いて、自分の考えに近い人は誰でしたか?」などと問いかけるようにすると、子どもたちは聞かなければ学習に参加できなくなると実感していきます。

そうしたことを積み重ねることで、聞き手を育てていくのです。

☞ Advice!

「聞き手スキル」の習得は、低学年のうちから指導を積み重ねていけば効果的です。そのため、高学年になってから取り組み始めるときには、「何のためにその聞き手スキルを使うのか?」ということを丁寧に説明しましょう。

どんな意見でも「認める」ことから始めよう

授業中に子どもたちがなかなか発言しようとしなため、話し合い活動を深めることができません。何から始めたらいいのでしょうか。



👉 **ここがポイント!**

『まずは子どもたちのどんな意見でも教師が認める』



😊 どんな学級でもスタートは同じところから

力のある教師の教室を覗いたとき、たくさん子どもたちが自分の意見をはっきりと発表している姿を見かけることが多いのではないのでしょうか。しかし、その教師の学級でも、学級開きの時点では、まだ子どもたちはおそろおそろの発言をし、ポツリポツリと意見を言うような状態からスタートしているはずで

す。スタートはその状態でも、どんな意見も認める教師の姿勢によって、子どもたちの発言力が徐々に育っていきます。

😊 子どもたちの発言にフィードバックを

どんな意見も認めるためには、教師にもスキルが必要です。それは、子どもたちの発言に対して、短くフィードバックをするということです。「〇〇という意見がいいね!」「〇〇かあ! それはおもしろいなあ!」などと、ほめ言葉を一言添えて返していくといいでしょう。

また、挙手をして発言をすることが苦手な子にも、ときには教師が指名をするなどして発言の機会を確保し、フィードバックも手厚くします。

😊 発言する前にできる手立て

子どもたちが発言することに抵抗をなくするための手立てとして、「発言前の指導」があります。

発言の前に、まず子どもたちに意見をノートに書かせ、机間指導しながら丸を付けて回ります。ときには「ここがいい!」と思う箇所に波線を入れてあげたり、花丸を書いてあげたりします。

そうやって、「あなたの意見は素晴らしいんだよ」ということを発言前に認め、自信をつけさせるのです。

📌 Advice!

子どもたちの発言後に、教師がどのようなリアクションをとるかというような「教師の司会力」で、授業の熱が大きく変わります。TV番組の一流の司会者などの司会術を参考にすることも司会力アップの秘訣です。